



## 英國の子供小説 オリバーツイスト

永代美知代

二

オリバーはロンドン郊外の往來で、久しい間じつと蹲つてゐたが、終に、ひどく一少年から注目されて居るのに気がついた。

この少年は四五年前に、此處を通りかゝつた時にもオリバーの容子を見据えて行つたのだが、今また引返して來ると、鋭い眼つきで、今一度オリバーを監察しやうとして居る。だが、此方を見たオリバーが眼を外したのを見て取ると、急にオリバーの傍へ寄つて來た。「一體君どうしたんだい？」

斯う聲をかけた様子と云つたら、まるで大人の紳士である。如何した譯だか大人の着物を着込んで、それがまた甚く汚れた、見られた服装ではないのだが、本人は好い氣で澄まして居る。獅子ツ鼻の、まづい面つきの少年だ。

「私は餓えて、疲れてるんです。長道を歩いて、今日でもう七日間歩き通しなんです。」

オリバーの眼から涙が湧いて出た。少年はそれを見ながら、いろんな事を訊いた。オリバーを全然不良少年だと思つたので、近所の小舎へ連れ込んで、ハムとパンを食べさせた。

ロンドンへ行くのか、泊る處があるのか、金を持つて居るのか、と訊いた上、オリバーが無一文だといふのを聞いて舌打をした。

「君はロンドンの人ですか。」

「さう、家に居る時はさうなんだ。君も一緒に行かないか、老人の紳士で、只で君を泊めてくれる人を知つてるんだよ。」

はオリバーを歓迎した。

「俺の友達、オリバー・ツイスト君。」

斯う「悪戯小僧」が紹介すると、少年達は交るくオリバーと握手する。

思ひがけない話に、オリバーは全然氣を引き附けられた。二人は何彼と打ち解けて話し合ふうちに、少年の名がヂャック・ドンキンと云つて、普通「悪戯小僧」で通つてゐると聞かされた。

ロンドンへは夕方入り込む積りの「悪戯小僧」の思はく通り、丁度灯ともし頃に着いた。ロンドン中でも一等汚い町らしい不潔な長屋町へ差掛かつたが、「悪戯小僧」はやがてとある家の裏戸を引き開けて、オリバーを連れ込んだ。

壁も天井も、家の中は眞黒に煤け返つて、爐の前に置かれた大きな卓子の上には、空壇の中につきさした蠟燭が燃えて居て、皿小鉢が並んで居る。それを四五人の少年が取巻いて居るのだが、どれも「悪戯小僧」と同じ年輩でありながら、長煙管で煙草をふかしたり、まるで大人のやうな風つきで酒を飲んだりしてゐる。だが、此處の主人は赤毛の陋しい顔をした老人の猶太人だ。「悪小戯僧」が何かこそ、耳こすりをすると、煙管を持つた少年達が傍へ寄つて來る、そして猶太人

「オイ悪戯小僧、オリバー君に爐の傍で御飯をあげな」  
猶太人は頻りにオリバーの來たのを喜んで居るといつて、盃に酒をついで、是非呑むやうに命令した。オリバーは早く呑み干さないと、みんなが待遠しがつてゐるかと思はれるので、やつとの事で飲んだ。が、食事を済ませると、直ぐもうぐつすり寝込んでしまつた。

翌る朝、オリバーは猶太人をはじめ「悪戯小僧」や、みんな他の少年達が一緒になつて、妙な遊戯をしてゐるのを不思議さうに見守つた。それは賭博なのだが、オリバーには何だか解らない。猶太人が仕方を教へても、よく覺らないので、無理から習はせられるのであつた。それから三四日後の事、オリバーは「悪戯小僧」ともう一人ベートといふ仲間の少年と一緒に、町へ連れ出された。

（つづく）